

「感染症」と授業づくりの原点

— 5 つの教育研究活動の根底にあるもの —

校長（地歴公民科） 西牟田哲哉

本小論では、本校の管理職である筆者が、令和 2 年度に学校内外で実施した主な教科関連（地歴公民科）の教育研究活動のうち 5 つを紹介し、そのいずれもが「感染症」に関わるものであることを指摘した。そして、その理由を説明し、5 つの実践の根底には筆者なりに考える「授業づくりの原点」が流れていると主張した。様々な教育技術（スキル）を活用しながらも、現場の教師は目の前の子どもたちをよく見て、「今、この子達に何を教えるべきなのか？」と真摯に自問する姿勢が、時に必要である。特に、変化の多い時代には所与を当たり前とせず、必要に応じて「教育内容」に回帰することが求められる。「感染症」の歴史授業への教材化を具体例としつつ、本来附属学校の教師が研究上すべき仕事はどんなものであるべきか、について、私見を述べた。

<キーワード> 感染症 歴史授業 附属学校 歴史総合

1. はじめに—5つの教育研究活動の共通点

以下にあげる 5 つは、いずれも今年度筆者が実際に行ったものである。いずれも、新型コロナウイルスに関わるものである。

- ① 7 月 27 日高大連携歴史教育研究会全国大会（Zoom 開催）第 3 部会「歴史総合」の部の課題研究「感染症の教材化と中・高・大の連携」のパネラーとして、「感染症」の教材化と歴史的思考力の育成について報告（25 分＋質疑応答）
- ② 8 月 20 日愛知県世界史教育研究会 「これからの社会認識教育における「反証可能性」の位置—「感染症」の教材化を事例にして—」Zoom で報告（30 分）
- ③ 9 月末から 10 月「教育実習」期間中の助言や指導—特に「コロナ禍とマスク越しの状況で、いかにして教師の声を子どもに届くように話すか？」について助言・指導
- ④ 愛知教育大学の後期の授業を担当。初等社会科教育法（2 年生対象）特に 11 月 30 日オンデマンドで「感染症」の教材化について」講義
- ⑤ 12 月 14 日本校全校生徒へ人権講話「「コロナ禍」と「人権週間」と「SDGs」の実施

一瞥してわかるように、令和 2 年度の私の主な教育研究活動は、いずれも「感染症」に深く関わっている。急遽教える内容や扱うテーマを状況に合わせて変更してきたのである。

①では、大会の運営にかかわる副会長という立場から、シンポジウムのテーマを「感染症」に変えるよう要望した。筆者はここ 10 年間校内では管理職であり、授業実践からは離れていた。その前までは県立高校の歴史・特に世界史の教員であった。「感染症」については、文字通り「ずぶの素人」である。「人権講話」も従来は別の内容であった。にもかかわらず、今年度なぜこれほどまでに「感染症」にこだ

わった教育研究活動に、急に“シフト”したのか？その答えと意味するところを、本小論で説明していく。

「教育研究や授業づくりの原点はどこにあるべきか？」——コロナ禍と格闘しながら1年間2つの高校で学校運営をして、そういった根源的なことを、改めて再考する機会を得た。本小論の場を借りて、私見として思う所を述べてみたい。筆者の今の思いをあらかじめ一言端的に述べれば、以下である。すなわち、「今、何をこそ、この子たち（あるいは、この人たち）に教えるべきなのか？」つまり「教育内容」（＝教える内容）への教師のリアルな思いが、現実を変革する力になる。様々な“スキル”でなく、「教育内容」への回帰——それこそが「授業づくり」の原点なのだ。個人として、そう主張したい、と考えている。

まずは、以下、①～⑤それぞれの内容を、簡単に概説的に紹介していく。

2. 5つの教育研究活動の概要と特徴

2-① 7月27日高大連携歴史教育研究会全国大会（Zoom 開催）課題研究「感染症の教材化と中・高・大の連携」のパネラー。「「感染症」の教材化と歴史的思考力の育成」について報告（25分＋質疑応答）

以下の箇条書きが、この報告の骨子である。

報告のレジュメ

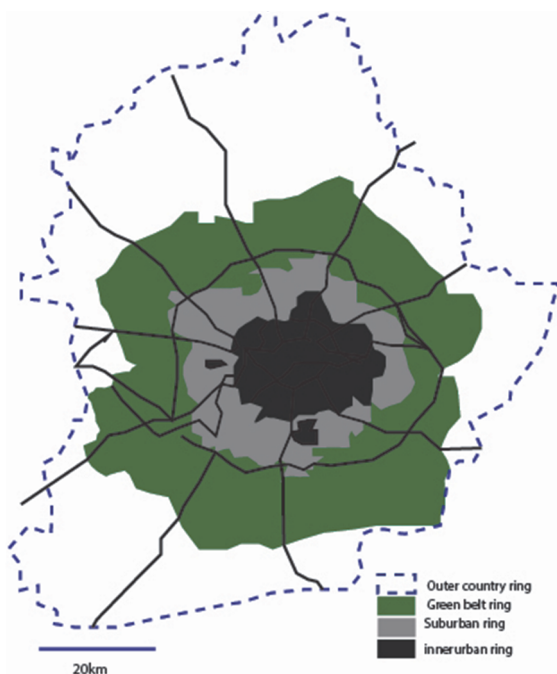
<「感染症」の教材としての特徴と課題>

- 1 感染症はほかの病気と比べて「自分が感染するかもしれない」という危惧が生じるため、感染者またはその疑いある者を、不用意に排除・隔離する傾向が強い。このことから、「社会的差別」が生じやすい。差別の例を歴史的事象から指摘せよ。また、「隔離」と差別はどう違うか？
- 2 感染症は人びとの身分や社会的地位に関係なく等しくふりかかる。そのため、社会全体への政策、衛生行政や上下水道等社会的インフラ整備に代表される、「公共」政策が解決のカギを握ることが多い。この動きによって人々の平等化が進むこともあるが、他方、すでにある格差が逆に拡がってしまうこともある。具体的に指摘してみよう。
- 3 感染症が社会にどう受け止められるかは、その当時の人々の「死生観」に左右されることが多い。14世紀ヨーロッパの黒死病（ペスト）、19世紀のコレラ、20世紀のスペイン風邪、21世紀のコロナ禍を例に挙げ、具体的に「死生観」とその影響について、調べてみよう。
- 4 感染症への対応として、国や軍・政府の機密事項を重視して、情報操作が行われ、世論の誘導や社会的な混乱を招くことがある。20世紀のスペイン風邪と21世紀のコロナ禍を比較して、各国の対応を論評してみよ。
- 5 感染症への対応には「社会的な連帯」が不可欠。国家を超えた協力（「国際協力」「グローバルな社会」での連携）や社会各地での連帯ができる場合と、自国に閉じこもり、個人や身内に閉じこもり、自民族中心主義（エスノセントリズム）・自国第一主義に陥り、個人がアトム（原子）化して、分断がますます進んでしまう場合に分かれる。何が、その分かれ目になると思うか？歴史的な事実に基づいて、考察してみよ。

報告では、上記のうち特に1と2を強調した。14世紀の黒死病、大航海時代の奴隷貿易開始の起因にも関わった天然痘、デフォアの描く「危機の17世紀」、パックス・ブリタニカの19世紀、世界中を席巻したコレラ、カミュの『ペスト』が描く行政の「事なかれ主義」、和歌山県有田市のコレラと蜜柑騒動、ハンセン氏病患者への差別、現代のSARS・エイズそして新型コロナウイルス（COVID-19）等など。1で示すように、確かに学校の地歴公民科や社会科の科目で、「感染症」を教材化する意識を持てば、特に社会的な差別問題を考えるきっかけになる例は、上記のようにたくさんある。この点を理解する関係者は多いことであろう。

一方、2の「公共政策」はどうか？「感染症」と「公共政策」が歴史教育でどう関係するのか？ピンとこない方も多々いるのではないだろうか？説明を要するかもしれない。報告では次のような資料を用いた。この資料の著者・横張真氏は大学時代の筆者の友人である。彼は歴史家ではなく、都市工学の専門家である。今回こうした新たな「教材」（資料は、授業にかけるとき「教材」となる）が、どのような経緯で「発掘」されたのか、も本小論では重要な観点であり、気に留められたい。

＜「グリーンベルト」とそこから排除される人々＞



「19世紀の西欧の都市では、中世以来の都市構造が温存されつつ、産業革命による急速な人口集積が起きたことにより、公衆衛生上の問題が多発した。19世紀後半の近代都市計画の誕生とその普及は、上下水道網の敷設など公衆衛生改善に大きな役割を果たす一方、都心においては高級住宅街、郊外にあってはグリーンベルトにより隔離された田園住宅という、富裕層のための排他的な居住空間の形成を促す結果にもなった。都市の蘇生を目指した都市計画が、富裕層は都心や田園郊外で俗世間とディスタンスを保ちつつ暮らし、その中間に中・低所得者層が密集して暮らす街が形成されるという、格差と差別の構図の顕在化にもつながったことは、近代都市計画のアイロニカルな側面として認めざるを得ない。」

（「With/Post Corona 時代の新しい都市計画：ベッドタウンの再生によるインクルーシブ社会の実現」
東京大学大学院工学系研究科 横張真・山崎嵩拓 都市計画学会学会誌『都市計画』2020年）

イギリスのロンドンでもフランスのパリでも、19世紀から20世紀初頭に都市計画が進んだおかげで現在のような整然とした近代的（モダン）な都市空間が誕生した。ナポレオン3世治世に整備された、凱旋門から四方八方に伸びるパリの景観は有名である。しかし、そのきっかけがコレラという「感染症」にあったことは、意外に忘れられている。私は前述した友人・横張氏から教えてもらった。現在のコロナ禍に苦しむ中で、私たちはそれぞれの専門分野を超えて、感染症の歴史を振り返ることになったのである。

公共政策によって市民の平等が予定通り進めば良い。が、しかし、誠に残念なことに、公共政策が“あだ”となり、“裏目”となって、結果的に社会の格差や不平等が拡大することもあるのである。先に引用した都市工学の研究は「公園と住民環境」という角度から、この「見えない格差の拡大」を教示してくれている。上の「グリーンベルト」は、「感染症」対策で始められた行政による、緑化という公共政策で

ある。「グリーンベルト」によって、ロンドンで中産階級と労働者階級が微妙かつ巧妙に区分けされ、結果的に格差拡大の土壌を醸し出しているのである。

「感染症」は、誰にでもふりかかる。だからこそ、国全体、政府主導で市民生活の大半を巻き込む政策が実行される。それこそが「公共政策」なのだ。19世紀の都市の大規模な下水工事もしかり、そして21世紀の日本の突然の学校休校もしかり、である。こうとらえることが可能であり、重要なのである。既に何人かの識者が全国一斉の休校による教育格差の拡大を指摘している。現代の問題意識が、「過去」を「発見」し「発掘」する。それは歴史家の特権ではない。教師でも高校生でも同じなのである。公共政策を実際に計画し実行するのが、国や県・市町村である。行政であり、官僚であり、公務員である。この意識を歴史教育は従来持ってきたか？これも今回のコロナ禍が示唆した教訓だと私は考えている。カミュの『ペスト』が世間で多く読まれているのに、学校教育がそうしたことの理由に鈍感であってはまずかろう。先の「グリーンベルト」が示す格差の様相は、今般のアメリカ合衆国のBLM運動にも通じる問題であり、歴史の発掘や「教材化」に値すると筆者は報告で強調した。副教材・資料集などで活用されれば、今後の歴史教育でも光が当てられるであろう。こうして教師が学校で教える「教育内容」は、時として修正や変化が生じることになる。その是非を、新学習指導要領も視野に入れながら、読者と共に本小論で随時検討していきたい。

2-②8月20日 愛知県世界史教育研究会

「これからの社会認識教育における「反証可能性」の位置—「感染症」の教材化を事例にして—」Zoomで報告（30分）

次にあげるA・B・C・Dの4つの資料は、上記の研究会で筆者が主たる説明に用いた資料や教材である。（Bは省略、Dは後述）



A（インターネット入手・出典はDに詳述）

左記のAの「挿絵」など、目を引く資料を教材化する時、気を付けたいことがある。へたをすると、意図しない結果として、情報操作に非常に弱い高校生を作ってしまう危険性があるということである。それに対抗するのが「反証可能性」である。その主旨の報告をした。

Aの資料は、14世紀の黒死病（ペスト）の流行に際し、しばしば日本の中学や高校で従来も教材として用いられてきた。以下のような具合だ。「このおどろおどろしい恰好をみてごらん。当時は、黒死病があまりにも怖かった。不安におののき、人々は「あいつと目が合った瞬間にこの病気はうつるんだ」とウワサが飛んだ。資料Cにあるように村上陽一郎先生の本でも、そう紹介されている。」「へー。なるほど。知識がないって怖いね、先生。目からうつるなんて。偏見だよね、先生？」

C

眼差しの殺人 西方ラテン世界におけるペスト感染論のなかで、もう1つユニークな議論を紹介しよう。モンペリエの医師の報告というのみで、これも著者不明の論考（1349年5月19日）であるが、そのなかに、次のような文章が見られる。

……普通この疫病は、空気によって、つまり病人と話をしたり、その呼気を吸ったりすることで感染すると言われている。しかし、この疫病の最も恐ろしいところ、すなわち、いわば「即死」をもたらすのは、患者の眼から発した一種の霊気が、患者のそばにいてその患者と眼を合わせた健康者の眼を撃った場合である。エウクレイデスの「視線学」に関する著作を読んだことのあるものなら誰でも、疫病がこのようにして起ることに疑いを抱くものはあるまい。これはごく自然に起るのであって、けっして何か神秘的な力によるのではない。

（中略）ハーティマー自身は、ペストの原因としての、腐敗した空気を説明するための文脈のなかで、否定的に言及しているにすぎないにしても、そうした発想がペストの伝染という現象に重ね合わされて理解されていることは、なかなか面白い事実ではないか。

（村上陽一郎『ペスト大流行』岩波新書 1983年P112～114）

上記のような具合で、昨年度までなら筆者もこの「おどろおどろしい絵」を14世紀の黒死病の教材として疑いもなく使っていたであろう。しかし、Aの資料を注意深く改めて見てみよう。書かれたのはいつだろう？「1656」という数字が下にある。14世紀からは300年近くたっている。私は今年度初めて疑念を挟んだ。そのきっかけは、やはり今回のコロナ禍である。その機会を与えた資料Dを読んでみよう。今年度出版された本からの引用である。

D

ヴェネツィアの絵ハガキに見つけた怪しい人物

（絵の題目として） 17世紀の版画に描かれたペスト医 大英博物館蔵

……奇妙なマスクが目飛び込んできた。一見すると肌色の鳥であり、それも美しくない。頭は禿げていて、嘴は太めで長い。インドで見たことのある、ハゲワシそっくりな顔である。店の中には、帽子を被り、鳥頭の仮面を着けて黒くて裾の長いガウン姿で細長い棒を持っている、怪しい人物の絵ハガキがあった。店の女性に聞くと“イル・メディコ・デッラ・ペステ”、ペスト医と答えた。……

（中略）罹ると死亡率60%～80%で、猛威を振るう疫病の前になす術なしでは、たくさんの医者が逃げだしたというのも、ふしぎではない。

奇怪なペスト医の衣装は現代から見ても合理的

一見、奇妙なペスト医の衣装は、イタリアだけでなく、パリやイギリスの古い絵にもあり、ヨーロッパ各地の医師に用いられていた。見掛けはおどろおどろしくて滑稽だが、案外それなりの医学的効果があった防護服かもしれない。使い捨てではないにしろ、全身を覆い尽くすガウンは、感染症防護服としては合理的である。病原体が何だったかは分からなかったにしても、病気の毒素が付着しないように、薄い絹などのツルツルの素材だ。手に持った細い棒は、感染した患者に直接触らずに脈を診るためのものだ。

（小長谷正明『世界史を変えたパンデミック』幻冬舎新書 2020年p18～37）

資料Dの小長谷先生の文章を熟読していくと、おどろおどろしい印象の、あのゴーグルのような眼鏡は、必ずしも「目を合わせるのを避けるため」ではなく、目からの感染を避けるため、という合理的な理由だったのかもしれない。教材としての資料は、正確に使用することが求められる。

2-③ 9月末から10月「教育実習」期間中の助言や指導

38人の教育実習生に、事前指導で私は次の2つの資料を配布した。いずれも部分になるが、ポイントになる箇所を引用する。

A 「腹式呼吸で「通る声」マスク越しの会話 訓練で楽に」(2020年9月2日中日新聞記事見出しより)
「…東海テレビアナウンサー庄野俊哉さん(54)は、腹式呼吸を意識した音読の訓練を通し「今こそ、マスク越しでも通る声を目指しましょう」と語る。(熊崎未菜)・・・対面で会話するとき、マスクをつけていると互いに相手の声が聞き取りづらい。・・・ポイントは腹式呼吸で発声すること。・・・最初はおおむけでへその下に手をあて、息を吸うときに腹を膨らませ、吐くときにへこませ、同じことを座った状態でも練習し、できるようになったら「あー」と声を出す。「腹式呼吸で吐く息にのせて声を出すイメージ」と庄野さん。・・・腹式呼吸で腹をへこませながら「あー」と15秒間、声を出す。毎日、少しずつ長くして30秒間ができるようになれば、「声を出すことが楽になる」という。(以下略)」

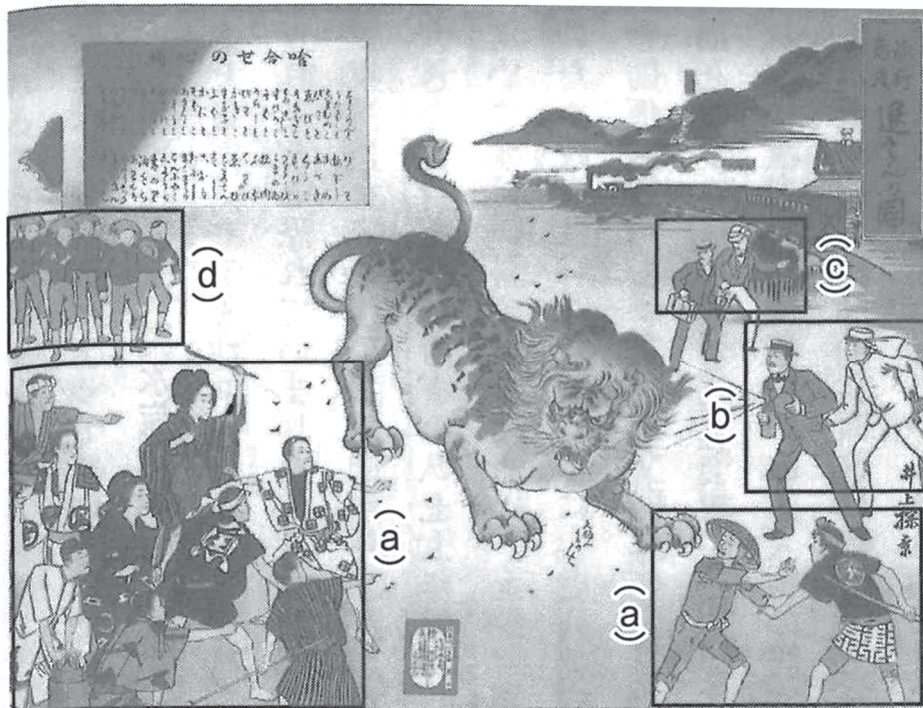
B 「教育実習の諸問題と「観察」指導の課題」(本校研究紀要第27号参照 冊子の拙稿)

「・・・授業やホームルームの中で多くの教師は日常様々な何気ない指導をしている。表面には出てこないこのような何気ない行為も、実は重要な教育活動の要素を構成していることがあり、教育実習の期間に少しでも見えるように変化してほしいものだと考える。しかしながら、すぐれた教師ほど、それらの行為を目立たずさりげなく行う傾向があるため、その多くを実習生は見逃すか、その意図に気づかず大学に帰ってしまうのが現状であろう。(途中略)・・・ごくありふれた行為の中に実は副次的で目に見えにくい別の意図が含まれている・・・ことに気づいて欲しい・・・。例えば、教室のうしろから入ると生徒の視線で黒板を見るきっかけができる。・・・後ろから見ると黒板の下15cmぐらいは見えにくいことや、曇りや雨の日は特に青いチョークの文字が判別しにくいことなど、様々なことに気づくものである。・・・ゴミを拾っていると、いつごろどのあたりでよくゴミが出るか次第に察せられるようになり、教員がいない時の生徒たちの様子や生活実態、精神的な“荒れ”の程度が、わずかではあるが推察できる。・・・どの教員も教室までの廊下を歩いているわずかな時間で、何らかの取捨選択基準を作って、そのいくつかを黒板に、いくつかを口頭で、いくつかは個人に個別に、分けていることであろう。・・・予測をしながら観察をすると、・・・“見え方”の質が変わる・・・。

教育実習生は通常、最終週に実施される研究授業の用意に実習後半は必死となる。教育方法学では、授業研究における4つのレベル(次元)の区別(をしている。)すなわち、(1)教育内容レベル(2)教材レベル(3)教授行為(教授方法)レベル(4)学習者レベルの4つである。・・・4つの区別と関連付けにどのような意義があり、それが授業の“見え方”とどう関係するか・・・。(以下ここでは省略)」

Aの資料を用いて、コロナ禍の中で「声の出し方」を実習生と一緒に練習した。また、Bの資料は毎年実習生に渡すことにしている拙稿である。実習前半は、「観察の仕方」、後半は、「研究授業の用意」に指導の主眼を置く。最後に出てくる「教育内容」と「教材」の区別は、意外に実習生には難しいらしい。本小論でも重要かつ区別すべき概念装置である。

2-④ 愛知教育大学の後期の授業を担当。初等社会科教育法（2年生対象）特に11月30日オンデマンドでの「「感染症」の教材化について」講義（資料のみ）



p 164の図1-9「流行悪疫退さんの図」（1880年）について

成田龍一『近現代日本史との対話
【幕末・維新—戦前編】』集英社
新書 2019年p 163

「中央に描かれた獣が「コレラ」です。コレラの恐怖は、「虎列刺」と当て字され、しばしば虎のような猛獣として表象されます。文明的な身体知を持たない人びと（a）は、コレラを遠巻きにして恐れています。文明的でないことは、この人びとが着物を着ていることによって示されています。他方、洋服を着ているのは、医者と警官（b）です。医者と警官そして役人は一緒になってコレラ対策に当たりました。その上方には、富裕者（c）が汽車で逃げていくさまも記されています。コレラは急性伝染病ですので、流行地から逃げ出すことも感染を避ける方策でした。さらに注目すべきは、左上に描かれている人びと（d）で、清国人たちです。医者によって石炭酸をかけられたコレラは、「支那ヘイカウ」と述べています。衛生を実践している日本と衛生の意味を知らない清国として、衛生を基準に序列がつけられ、対比的に描かれました。」



スペインかぜ大流行のためマスクをする女学生
「20世紀2001大事件」より

スペイン風邪と新型コロナウイルス

「参考にするべき歴史的イベントは、SARSやスペインエボラ出血熱よりも「スペイン風邪」、すなわち、スペインインフルエンザだと私は考える。百年前のパンデミックである。アメリカを震源とするこのインフルエンザの災いは、戦争中の情報統制で中立国だったスペインからインフルエンザの情報が広まったため、スペイン人にとっては濡れ衣にほかならない名前が歴史の名称となった。」（藤原辰史「パンデミックを生きる指針」岩波新書編集部）

2-⑤ 12月14日本校全校生徒へ人権講話

「コロナ禍」と「人権週間」と「SDGs」の実施（資料のみ）

- ・発生源の疑惑のある地域の人々に対するまなざし
- ・マスクの取り扱いや持たない人への非難、トラブル
- ・感染する、または感染した、おそれのある人への「排除」や「隔離」の要求
- ・デマや流言を信じ、心無い表現をつぶやく人々
- ・医療従事者・看護師である保護者への見学拒否
- ・感染者が出た大学や高校の一般学生・一般生徒への、根も葉もない誹謗中傷
- ・在宅勤務可能な業種とそうでない業種の差
- ・オンライン授業が可能な学校とそうでない学校の差
- ・WiFi環境やパソコンが整っている家庭とそうでない家庭の差
- ・一時金の給付でしのげる人としのげない人の差
- ・一時金も入手できない人の存在

1

「誰一人置き去りにされない社会」

「誰一人取り残さない社会」

の実現を

～2020年1月1日の中日新聞・社説が
国連サミットのスローガンを紹介

これは、実現できているか？

2

この理念を根本にして、2015年
から始まったのが

SDGs

の取り組み

世界経済や地球規模の環境問題を
視野に入れながら、根本的には、一
人一人の人権尊重に根ざした社会運
動

3

社会全体が荒廃しているとき



その最大の被害を受けるのは、決まって
社会的な弱者の層（人権の問題を重ねて考えたい）

→ この年末に年を越せない不安を抱えている
人々が日本にも万単位で存在するはず。子ども食
堂の経営危機。

4

世界に目を向ければ

・アメリカの黒人問題～なぜ同じコロナ禍
の下で、白人より黒人の感染や重症化が
圧倒的に多くなってしまったか？

→BLM運動の本質をとらえる目を養いた
い

・アフリカの貧困や飢餓、60人に1個の
サッカーボール、環境破壊や気候変動の
被害者

5

・高度経済成長から新自由主義、グローバ
リズムへの流れ。

・自由競争と自己責任の名のもと、グロー
バリズムのローラーが作ったアスファルト。
そのメインストリートから、様々な理由で、
はじき出され、置き去りにされてきた人・モ
ノ・コト・心。それらの存在に今一度目を戻
し、思いを寄せてみる必要があるのでは？

6

3. まとめにかえて―「教育内容」のイノベーションと「附属の研究」

本小論のまとめや結語に際し、まず筆者の「感染症」の授業をオンデマンドで受けた大学2年生の感想を紹介してみる。

「私は高校生のとき世界史を選択していました。世界史はかなり苦手だったのですが、ペストの話は高校の授業で聞いていたために、なんとなく印象に残っていました。新型コロナウイルスの感染により世の中の動きが大きく変わった二年後の今、改めてペストに関連する話を聞いてみると、高校生のときに比べて日常に照らし合わせながら実感できる話が多く感じられたので、興味深く思いました。ペストが「目と目が合った瞬間に感染する」という話は、高校生のときも聞いたことはあり、当時は「そんな馬鹿げた話」と軽蔑するかのような感想を持ちました。しかし、本日の授業を受け、現代でも「看護師の子どもは保育園に連れてきてはいけない」「和歌山から送られてきた蜜柑は受け取らない」など、誤った情報で人を排除する行為が行われている現実を考えると、科学が発展した現代でも、デマが信じられてしまうのだと驚きました。混乱が起きている現代だからこそ、合理的な根拠を持って情報を入手できるよう、留意しなくてはならないと考えました。」（M・I 国語選修2年。一部修正あり。）

ここにあるように、同じ「感染症」の授業でも、状況によって捉え方が大きく変化することがわかる。私たち教員は、学習指導要領に則り年間学習指導計画を立て、教科書の教材群を適切に用いて授業をしていく。もちろんそれが普通である。しかし、その一方、状況によって、学習は変化するものであることを踏まえ、常々「教育内容」の重点のチェックをその都度すべきなのだ、というのが私の考えである。

改めて新学習指導要領を注意深く読むと、コロナ禍騒ぎ以前に作成されたものであるにもかかわらず、「感染症」をとりあげるような解説を「歴史総合」の科目でも見つけることができる。ただ、それは主に「グローバル化と私たち」の項目に入っている。本小論で示してきたように、現代だけでなく、19世紀のコレラや20世紀前半のスペイン風邪など「近代化と私たち」「国際秩序の変化や大衆化と私たち」の項目でも、十分教材として機能する。同じ新指導要領の「開発・保全」「平等・格差」「自由・制限」といった観点を鑑みても、「感染症」というテーマから時機を得たふんだんな「教育内容」を導き出すことは十分可能であると私は考える。

どういうタイミングでどの教材を、いかなる形で用いるか？現場内外には様々なスキルが飛び交う。近くで子どもを見ている教師が得る情報は多い。学習権思想を日本に定着させた教育学者・堀尾輝久が言うように、「子どもの学習する権利を保障しようと、奮闘する個々の教師の、教育実践そのものが、教育学という学問」なのである。公教育の教師の「教える自由」は、当然ここに限定される。（堀尾輝久『教育の自由と権利 国民の学習権と教師の責務』青木書店 2002年 参照）その限定の中で「何をこそ、今、この子たちに教えるべきなのか？」と教師は時に真摯に自問しなければならない。「教育内容」への回帰である。授業づくりの原点は、ここにある。そして、この瞬間に「教育内容」のイノベーションが生じることがある。社会が変化する時代は、なおさらである。「附属の研究」は、このイノベーションに責務があると私は思っている。

<参考文献>～本文に紹介できなかったものに限る。

各誌等が新型コロナウイルス関連の特集を組む中、筆者は『文藝春秋』『中央公論』『世界』『内外教育』に目通しした。本稿の論点に関わるものを中心に以下に掲載する。

『文藝春秋』2020年

4月；磯田道史「「感染症」の日本史～答えは歴史の中にある」（以下、毎月磯田氏の連載あり）佐伯啓思「グローバル化の「復讐」が始まった」

6月；中条省平「カミュ「ペスト」は教えてくれる」

7月；エマニュエル・トッド「犠牲になるのは若者か、老人か」柳田国男「この国の「危機管理」を問う 「リスク分析先進国」ドイツと日本は何が違うのか」小林喜光・山極壽一「デジタル独裁VS東洋的人間主義」保阪正康「日本の地下水脈第1回「疫病とファシズムの足音」」

8月；丹羽宇一郎「日本よ、「鎖国」するな」鈴木直道北海道知事「伝える力こそリーダーの命です」國分功一郎「大切なのは「生きる」ということをバラで飾ること」石戸諭「自粛警察—小市民が弾圧者になる時」山田俊弘「ツイッター社長直撃「つぶやきの暴力」を考える」

『中央公論』2020年

4月；東浩紀・山本龍彦『民主主義の抑制』が問われる21世紀の政治思想（『内外教育』でもこの論考を紹介）佐藤優・本村涼二・山本昌之「AI社会が直面する見えざる脅威 疫病という「世界史の逆襲」山本太郎「感染症と文明社会 黒死病、スペイン風邪から考える新型肺炎のゆくえ」

6月；鈴木一人 細谷雄一 訥摩佳代「アフターコロナの地政学」渡辺靖「コロナ禍が加速する「大きな政

府」への期待」佐藤優「国内の行政権が強まりグローバリズムは後退する」
7月；山崎正和「21世紀の感染症と文明 近代を襲う見えない災禍と日本人が養ってきた公德感」松岡亮二「ICT、9月入学・・・教育格差を是正するには」高口康太「監視社会と感染症」
8月；岩本悠 中室牧子 牧島かれん「コロナ後の教育 変えるべきもの、変えてはならないもの」伊藤昌亮「自粛警察と新自由主義」 前嶋和弘「黒人抗議運動と大統領選の行方 BLMは第二の公民権運動になるか？」

『世界』2020年

5月号；前川喜平「教育政策と経済政策は区別せよ」
6月号；辻元「デジタル教科書は万能か？」中村文夫「ICT教育は教育スタンダードになるか？」
7月号；田中純「生の弱さの底に降りて行く」大内裕和「コロナ災害と教育格差から学生を守る」

単著；

『コロナ後の世界を語る 現代の知性たちの視線』朝日新聞社編・朝日新書 2020年
『コロナ後の世界 世界の知性6人に緊急インタビュー』文春新書・大野和基編 2020年
『コロナ後の世界を生きる一私たちの提言』村上陽一郎編・岩波新書 2020年
池上彰・増田ユリヤ『感染症対人類の世界史』ポプラ新書 2020年
岡田晴恵『人類 vs 感染症』岩波ジュニア新書 2004年
山本太郎『感染症と文明―共生への未知』岩波新書 2011年
中条省平『NHKテキスト100分de名著アルベール・カミュ ペスト』（NHK出版）
エマニュエル・トッド『大分断 教育がもたらす新たな階級化社会』PHP新書 2020年
志水宏吉『「つながり格差」が学力格差を生む』垂紀書房 2014年
松岡亮二『教育格差』ちくま新書 2019年
飯島渉『感染症の中国史』中公新書 2009年
飯島渉『感染症と私たちの歴史・これから』清水書院 2018年
マクニール『疫病と世界史』中公文庫 1985年
蟹江憲史『SDGs（持続可能な開発目標）』中公新書 2020年

論文；

アマティ・マルコ、横張真「1930年代のロンドングリーンベルト設置時における土地所有者、政府、プランナーの動向」（『ランドスケープ研究 67（4）』2003年）
羽貝正美「近代都市計画とパリ都市改造」（『総合都市研究』第58号 1996年）
東京大学・東京カレッジ・連続シンポジウム「コロナ危機を越えて」2020年6月23日（YouTube）も参照。

新聞記事；

藤原辰史「人知を軽んじた失政 歴史に学ばず、現場を知らず、統率力なき言葉」（朝日新聞 2020年4月26日）
藤原辰史「コロナ禍の今こそ歴史に学べ」（2020年4月29日中日新聞安藤恭子による「生きる指針」からの引用）ほか多数。